

## 岩田系図諸本の比較分析（一）

根ヶ山 泰史

### はじめに

本稿は、丹党岩田氏に関する系図の諸本を紹介するとともに、それらの比較分析を行い、岩田氏の来歴等について考察するものである。

岩田氏は、武蔵武士のうち丹党に属し、武蔵国秩父郡岩田（現長瀬町）の地を本貫とする一族である。秩父地方の丹党武士団の中では中村氏に次ぐ有力な氏族で、中村氏が西遷等により各地へ分散したのに対し、岩田氏は一貫して当該地域を中心に活動し、中世を通じて勢力を維持したとされている<sup>(1)</sup>。

この岩田氏をめぐっては、近年、禅宗史料に着目した森田真一氏の研究により、中世後期の秩父郡に本拠地をおく有力な領主であったことが指摘されている<sup>(2)</sup>。また、筆者も新井浩文氏とともに福井県小浜市所在の「岩田家文書」を紹介し、岩田氏に関する新出の系図や古文書写本等の存在を明らかにした<sup>(3)</sup>。

旧稿では、この小浜市所在の系図（以下「小浜本」とする）以外にも、寄居町の岩田栄蔵家に伝来したとされる系図（以下「寄居本」とする）や小鹿野町指定有形文化財「岩田家文書」中の系図（以下「小鹿野本」とする）について言及したが、小浜本については紙幅の関係で全体の釈文を提示することができず、寄居本・小鹿野本については原資料の調査

に至らず、相互の内容の異同については機会を改めて検討するとして課題を残した。

その後、寄居本・小鹿野本については、幸いにして原資料を調査する機会を得た<sup>(4)</sup>。よって本稿では、右記の岩田系図三本の釈文を掲載し、その全体像を明らかにするとともに、その他の関連系図も可能な限り紹介し、相互の比較分析を行うこととした。これにより、史料制約から十分な説明が進んでいない岩田氏の事跡や来歴等についても、新たな可能性を提示できるものと考えている。

なお、紙幅の制限により、本稿は複数号にわたる掲載となる予定である。第一分冊の今号では、未翻刻の寄居本・小鹿野本について釈文を掲載し、次号以降では小浜本及びその他の関係系図の釈文を掲載した上で、諸本の概要を紹介し、相互の異同等について検討を行いたい。

### 第一章 岩田系図の諸本

本章では、寄居本・小鹿野本・小浜本やその他の関係系図について釈文の提示を行う。今号では、寄居本「丹党岩田丹治比姓系図」および小鹿野本「丹治姓岩田系図」の釈文を掲載する。なお、釈文掲載にあつての凡例は註に記載した<sup>(5)</sup>。

【史料一 丹党岩田丹治比姓系圖（寄居本）】<sup>(6)</sup>

〔<sup>外題</sup> 岩田丹治比姓 系圖〕

丹黨 家紋丸中丹一文字

岩田丹治比姓 系圖

本國武藏國秩父郡白鳥郷岩田邑、岩田者邑名』而、在於武藏國秩父郡、<sup>〔土力〕</sup>士人說、一大石在田邊、號岩田』邑、以岩田爲欄號者、第十八代丹治政廣始領其所、』有屋敷跡、』吉例年每三九日、以一羹・二麴饗應之、自祖至今』用此例也、』丹黨氏神丹生大明神社、在於岩田邑每年九月十九日、』爲祭禮又同邑野上村勸請丹生社、每年二月朔日祭』祀之、惣丹黨之在邑必齋祭丹生社也<sup>云、</sup>

第二十九代

宣化天皇

諱武小國押盾、繼體天皇第二子也、母曰日子媛』是尾張連草香女、雄略帝十二年戊申生、安閑帝<sup>〔開〕</sup>二年乙卯十二月即位、二年春正月遷都于大和國』高市郡檜隈廬入野、夏五月詔曰、食者天下之本』也、黃金萬貫不可療飢、白玉千箱何能救冷收藏』穀稼蓄積儲糧遙設凶年厚饗良客修造官』家那津之口、四年春二月甲午崩明年七十三、』葬于大和國桃花鳥坂上陵、

上殖葉皇子

亦名梔子、是丹比公偉那公凡二姓之先也、母』橘仲皇后、

「十市王

多治比古王

亦名多治比彥武王、』河內國丹南郡多治比村若松天神、延喜式所載』丹治比神社是也、每年六月二十五日・十一月十五日』修祭事、則丹治比古王之靈社也、令欄菅神、非也、

左大臣、正一位

島真人

天武帝十一年、筑紫大宰丹比真人島等貢大』鐘、同十二年貢三足雀、持統帝三年、以直廣壹授、』直廣貳丹比島增封一百戶、同四年正月己卯、公郷』百寮拜朝如元日會儀、島真人與布勢御主人』朝臣、奏賀騰極、同年七月、正廣三右大臣、同五年』增封三百戶、通前五百戶、文武帝四年正月癸亥、』有詔賜靈壽杖及輿儼、同年八月、左大臣、大』寶元年三月甲午、正二位大納言、同年七月壬』辰、薨、詔、遣右少辯從五位下波多朝臣』廣足、治部少輔從五位下大宅朝臣、金弓等鑒』護喪事、又遣三品刑部親王、正二位石上朝臣』麻呂、就第、吊賻之、正五位下路真人、大人爲公』卿之誅、從七位下下毛野朝臣石代、爲百官之』誅、大臣者、宣化天皇玄孫多治比王之子也、』和銅五年九月己巳、詔曰、故左大臣正二位多治比』真人島之妻家原音那、賜右大臣從二位大伴宿』欄<sup>〔彌〕</sup>、御行之妻紀朝臣音那並以夫存之日、相勸』爲國之道、夫亡之後、固守同墳之意、朕思、彼』貞節感歎之深、宜此二人各賜邑五十戶、其家』原音那加賜連姓、

池守 大納言、從二位 大宰帥

持統帝七月、直廣肆、和銅元年三月、民部卿、同<sup>〔禮〕</sup>年九月戊子、爲造平城宮司長官、同六年四月<sup>〔始從四位上〕</sup>乙卯、正四位下、同七年正月、從三位、靈龜元年五月壬寅、大宰帥、養老元年二月辛巳、賜大宰<sup>〔禮〕</sup>帥池守、綾一十四、絹二十四、純三十四、綿三百屯<sup>〔禮〕</sup>布一百端、褒善政也、同二年乙巳、中納言、同五年正月壬子、大納言、神龜元年二月甲午、益封五<sup>〔禮〕</sup>十戶、同二年十一月、賜靈壽杖並繩綿、同四年正月<sup>〔禮〕</sup>庚子、從二位、同十二月辛亥、引百官史生已上、<sup>〔禮〕</sup>拜皇太子於大政大臣第、天平元年二月、就長屋王宅、窮問其罪、同二年九月己未、薨、左大臣島第<sup>〔禮〕</sup>一子也、

縣守 中納言、正二位、征夷將軍宣命之始也、

慶雲二年十二月癸酉、從六位下、和銅三年四月壬午、<sup>〔禮〕</sup>從五位上、靈龜二年正月癸巳、從四位下、同五月<sup>〔禮〕</sup>壬寅、爲造宮卿、同七月癸亥、爲遣唐押使、<sup>〔禮〕</sup>養老元年三月己酉、賜節刀、同二年十月、大宰府<sup>〔禮〕</sup>言遣唐使、縣守來歸、十二月壬申、縣守等自<sup>〔禮〕</sup>唐國至甲戌進節刀、同三年正月辛卯、天皇<sup>〔禮〕</sup>御大極殿受朝與從四位上藤原朝臣武智麻呂<sup>〔禮〕</sup>二人贊引皇太子也、同年壬寅、正四位下、同年七月<sup>〔禮〕</sup>庚子、管相模・上野・下野三國、于時武藏國主也、<sup>〔禮〕</sup>同四年九月戊寅、爲持節征夷將軍、同五年正月<sup>〔禮〕</sup>壬子、正四位上、同年四月乙酉、爲鎮狄將軍、同年<sup>〔禮〕</sup>六月辛丑、中務卿、天平元年三月甲午、從三位、同<sup>〔禮〕</sup>三年八月丁亥、兵部卿、同年十一月丁卯、山陽道鎮撫使、同四年正月甲子、中納言、同年七月丁亥、山陰<sup>〔禮〕</sup>道鎮撫使、

同六年正月己卯、正三位、同七年二月<sup>〔禮〕</sup>癸丑、赴於兵部曹、問新羅入朝之旨、同年十一月<sup>〔禮〕</sup>乙丑、舍人親王薨、天皇遣縣守就第宣詔贈<sup>〔禮〕</sup>大政大臣、同閏十一月壬寅、天皇臨朝、召諸國朝集<sup>〔禮〕</sup>使等、縣守宣勅、同九年六月丙寅、薨、島之第<sup>〔禮〕</sup>二子也、

水守 宮内卿 從四位下

大寶二年十一月丙子、賜封一十戶、于時從五位下、<sup>〔禮〕</sup>同三年七月甲午、尾張守、同四年五月乙巳、河内<sup>〔禮〕</sup>守、和銅元年三月、近江守、同二年、從四位下<sup>〔始正五位下〕</sup>、同年九月、美濃守、同三年四月癸卯、<sup>〔禮〕</sup>右京太夫、同四年庚寅、宮内卿、水守卒、島之第<sup>〔禮〕</sup>三子也、

廣足 中納言 正四位上

養老元年八月甲戌、赴於美濃州、造行宮、<sup>〔禮〕</sup>神龜三年正月庚子、正五位下<sup>〔始從五位下〕</sup>、同年九月<sup>〔禮〕</sup>壬寅、爲造頓宮司、天平五年、上總守、同<sup>〔禮〕</sup>十<sup>〔禮〕</sup>八年四月、刑部卿、同十九年正月丙申、從<sup>〔禮〕</sup>四位上、同年二月、兵部卿、同廿年二月己未、<sup>〔禮〕</sup>正六位下、同廿一年七月、正四位上中納言、天平<sup>〔禮〕</sup>勝寶二年正月乙巳、從三位、同六年七月癸丑、<sup>〔禮〕</sup>造山司、同年十一月甲申、藥師寺僧行信與八<sup>〔禮〕</sup>幡神宮主神大神多摩等同意厭魅下所司<sup>〔禮〕</sup>推勘罪合遠流、廣足就藥師寺宣詔、同八<sup>〔禮〕</sup>年五月丙辰、造山司、天平寶字元年八月庚<sup>〔禮〕</sup>辰、勅廣足年深將耄力弱就列不教諸<sup>〔禮〕</sup>姪悉爲賊從如此之人、何居宰輔宣辭中<sup>〔禮〕</sup>納言、以散位歸第焉、同四年正月癸未、薨、<sup>〔禮〕</sup>廣足者平城朝時歷仕内外、至中納言、勝寶<sup>〔禮〕</sup>九年坐子姪黨逆而免職歸第、以散位<sup>〔禮〕</sup>終焉、島之第四子也、

式部卿 皇太子傳 中納言從三位

廣成

和銅元年正月、從五位下、始從六位上、同年三月『丙午、下野守、同五年、從五位上、同七年十一月』庚戌、副將軍、養老元年正月、正五位下、同三年『七月庚子、管能登・越中・越後三國、于時越前』國主也、同四年正月甲子、正五位上、神龜元年『二月壬子、從四位下、天平三年、從四位上、同四年』七月丁亥、遣唐使、同五年三月戊午、拜朝、閏『三月癸巳、辭見授節刀、同年四月己亥、遣唐』四船自難波進發、同六年十一月丁丑、入唐』大使廣成來著多禰島、同七年三月、正四位上、同九年八月唐申、參議、同年九月己亥、中納言、同十年正月、兼式部卿、同八月乙亥、武藏守、同十一年四月戊辰、薨、島之第五子也、

武藏守 從五位下

濱成

寶龜九年十二月己丑、判官、天應元年八月丁丑、從五位下、同年十二月丁未、造山司、延暦元年閏正月甲子、左京亮、同年『八月乙亥、少輔、同三年十二月己巳、從五位上、同四年八月丙子、右中辯、同六年二月庚辰、常陸介、同七年三月己巳、征東副使、同九』年三月丙午、陸奥按察使兼守、同十年七月壬申、征夷副使、

從五位上 木工頭

貞成

天長九年四月二十五日、改多治比、為丹治、

左京大夫 從四位上

峯成

從四位下 因幡守

永成

永成六世孫幹成大夫判官從四位上武藏介、其子宗直私市』大夫、從五位下相模介・武藏守、其子孫代』代稱私市大夫、住武藏州私市邑、所謂』私之黨、河原・私市・熊谷・瀬山・瓶尻・春』原等祖也、

左中辯

貞峯

貞峯者、右京人也、入學有才藻奉試及』弟〔第〕、補文章生、天長十年、兵部少丞、承和五』年、從五位下、除播磨介、同十四年、民部少輔、嘉祥三年、遷為駿河守、為政清厚吏民』稱之、齊衡三年、大學頭、天安元年、遷刑』部少輔、同二年、民部少輔、數月拜右少辯、同年八月、文德帝崩故、為裝束司、同年十月八日、迎伊勢齊內親王、十一月七日、從五位上、貞觀五年二月十六日、右中辯、同日大監物、同』八年二月廿一日、賜姓多治真人、先是、貞峯』等上表曰、因土民氏百王之彝規分姓成』親千古之茂典姓幸其本何記皇流氏』失其初誰知、天應私檢吉野宮

武信	御宇、宣化』天皇皇子加美惠波皇子生十市王、十市王』生多治比古王、此王生産之夕、忽多治比之』花飛浮湯沐釜、以斯冥感、名多治比古王、』成長後、固執謙退奏請求姓、因賜多治』比之公便、以名爲姓存其舊意、淨御原』天皇十三年、氏は時多治比古王左大臣正』二位志摩公賜姓真人、是貞峯高祖父也、』天平十六年、遣唐使正三位中納言兼皇太』子傳式部卿、多治比真人廣成入唐之日、』改作丹墀、復命之後、猶用舊姓傳來百年』無心變改、天長九年四月廿五日、木工頭從』五位上、多治比真人貞成等奏請、改多治』比三字、爲丹墀兩字、當于斯時、貞成』等身非氏長、不預私議心懷不穩無駭』論之夫物貴不失真理、則言因實、豈偏』賞入唐之新文訛所生之舊字乎、加之、竊』案文辭情思義理丹墀真人是涉忌諱』伏願以古多治字換今丹墀姓緣煩文』請省比字、雖除一字稱謂不變、然則、』存先祖之感生貽孫謀於不朽不勝懇』歎之至、拜表以聞詔許之云、同年、正五位下、』同十年正月七日、從四位下、同月十六日、遷為』伊勢守、不之任、同十二年七月九日、獻蓮』一莖二花、同十六年十一月九日、卒、壽七十』六歲、
	右大臣

武信	陽成帝元慶元年、下向武藏國、依之、後裔』繁榮於加治卿・ 秩父郡・加美卿・一井之地、
桑田丹二、大夫	

「峯信	
峯時	胃云、峯明
丹貫主	始住關東、産武州、
峯房	武藏守
太夫	丹貫主 官領
武經	始住武州秩父
丹貫主	
武時	
四郎冠者	
武峯	二大夫
經房	丹三冠者
中村	竹淵 鹽屋 古郡 大河原 黒谷 岡田
下中村	小鹿野 坂田 大窪 栗毛 横脛 横瀬
弥那	本田 十六苗字祖

國時	黒谷五	異曰、則政	長房		薄二郎
			薄		織原 二苗字祖
基房	秩父黒丹五	異曰、勅使河原黒丹五郎	勅使河原		堀口 南荒居 青木 新里
			由良 安保 瀧瀬 長濱 榛澤 小嶋		
志水	加治	高麗 十四苗字祖	俊貞		加治三郎 左衛門尉
			基氏		桐原孫三 左衛門尉
基兼	判乃三郎		行房		白鳥七郎
			白鳥		岩田 藤弥淵 野上 罪山
井戸	山田	葉栗 八苗字祖	基政		七丹二郎
			國時		黒谷五 異曰、則政

富士野夜討時、為曾我時宗蒙疵 <sup>云、</sup>	
政光	山田六郎
岩田七郎	
政廣	
東鑑第二十五曰、承久三年六月十四日、於宇治川』上首一討捕 <sup>政廣、鎌倉勢</sup> 、是在金持兵衛之日記、』此時、鎌倉勢中蒙疵之中、岩田八郎云者、』愚按、山田八郎歟、岩田七郎・同岩田二郎』亦得首二、是皆載金持兵衛之日記、	
政成	山田八郎
政信	岩田二郎、』號藤矢淵
政經	野上三郎
東鑑曰、建長二年、於京都以課役出材木者』称岩田三郎、	
政家	白鳥四郎
岩田五郎	
廣方	
小五郎	

長廣	彦五郎 右近將監	成房 十郎	長房 九郎	行時 六郎	忠國 小五郎	政房 小八郎	政茂 小七郎	廣房 又五郎	廣家 七郎	廣員 六郎	廣時
----	-------------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----

實成 青木二郎	基廣 右近將監	實長 岩田將監太郎 左衛門尉 異曰、實利 薙髮 <small>(足利)</small> 勝定院義持將軍之時、鎌倉足利左馬頭』持氏之時、在應永二 十四丁酉年上杉氏憲入道』禪秀亂之舊記、	實春 將監二郎、』號西安保、	女 藤田 藤田 <small>前名 野太郎</small> 長門守小野宗員妻 藤田系図曰、岩田左衛門實利一女、藤田野太郎』宗員娶之、 宗員後改長門守、 岩田實利入道』以一跡授宗員後、宗員聞入道 之有實子、以』岩田之地授之、是永享比、岩田太郎三郎』 <small>改</small> 式部少輔 丹治比實員、	實員 太郎三郎 式部少輔	太郎 刀先生 <small>(帶脱力)</small>
------------	------------	--	-------------------	---	-----------------	--------------------------------

忠重		良堂 参内之僧、』和尚	
忠幸		太郎	
義幸		母者、 <small>西上野國 後閑住人</small> 後閑左京大夫源宗久女	
義幸 三郎 對馬守		母同	
義幸		對馬守 從六位下	
義幸者、丹太郎忠重三男也、 母者、上州後閑領主後閑左京大夫源宗久女也、』對馬守、戒名 臨田淨室居士并其妻香室貞蓮大姉、』右夫婦之位牌在岩田村 <small>臨濟宗 妙心寺派</small> 道光寺・瑞岩寺』 <small>真言宗 新義</small> ・満光寺其外在岩田領所々之寺、		義眞 後閑孫太郎	
幸重		岩田孫二郎 左衛門太郎	
河内守			

女		人見越前守安利妻	
女		本田筑前守貞信妻	
女		諏訪部三河守光長妻	
房幸		岩田三郎六郎	
房幸		三郎六郎 伊勢守	
房幸		實者、對馬守義幸末子、』秩父岩田祖、	
幸勝		彦三郎 土佐守	
幸勝		母者、藤田中務大輔女、 属上杉 麻生太郎左衛門勝家書曰 <small>勝家者岩田、 幸勝之與子也</small> 、土佐幸』勝養兒有法、飲食 常撰毒与能當醫家之節、故』數子皆健也、又平生扛重攀高、故 成長之後、盡多』力剛強也、且雖不要博學、每每說古人忠義之 行、』使兒等記憶之、故顯勇猛 <small>云</small> 、故所其教、所其育、』義守 己、勇過人、由是、父慈子豈可不慎乎、』秩父郡四万部・横瀬・ 宮澤・野上・藤矢淵・金尾・』岩田邑中、以永樂錢五百八貫八 百緡、構菟裘、』戒名善譽真公居士、	



<p>女 小幡左衛重景妻 上州國峯小幡城主也</p>	<p>重行 橡原木工之助</p>	<p>女 本庄藤太郎藤正妻</p>	<p>範平 童名猪野丸 猪俣和泉守、『外祖父為養子 母猪俣彈正忠小野範宗女、</p>	<p>幸清 左衛門太郎 河内守 從六位下</p>	<p>土佐守幸勝嫡子 母猪俣彈正忠小野範宗女、『 數代属上杉家幕下有軍功、天文四年河越夜軍之時、『幸清者、 榛澤郡藤田城主藤田右衛門佐小野邦房』因為一家、同意藤田、 降北条氏康、弟彦二郎吉次者、『属舊主上杉憲政趣上野國、此 時、兄弟相隔離、』 武州秩父郡白鳥庄岩田邑多年居住襲世、属上杉『管領麾下、 至上杉憲政之時、幸清父幸勝忠節無貳心、是以管領寵光預別所 邑久那地、属以久』那猪鼻七騎・大瀧七騎、土佐守入道宗真當 此時、『世人士佐守入道稱久那殿、幸勝為深山保守兄猪俣』和 泉守範幸居榛澤郡、三男岩田彦二郎吉次、『四男市右衛門吉重、 五男平藏等、保守男衾』城、宗真入道二男幸清住秩父郡久那、『 武田信玄以野心、為圖武州比企郡松山城主上杉』憲實、窺松山</p>
----------------------------	------------------	-------------------	--	--------------------------	---

<p>城、秩父郡武信甲三四州近故有捷』徑信玄出秩父山松山潛行道 假久那邑時、遇』騷雨依遣使幸勝父子館、乞假笠、此日館主 他』行、二男幸清在家、則逢使、與簀笠百、信玄喜謁、『謝幸 清畢、上杉管領聞此事、大怒曰、卒然應需』羈族之士、且饗之、 其意難量、以此沒收猪鼻・』大瀧邑、又久那別所宮穿墮、不窺 官領令為』私、又設柵旁、有讒者忽沒收此也、『永祿五年正月、 北条氏康・武田信玄以兩軍拔松山城、『上杉官領敗績、氏康大 克、自是以往、幸勝属北』條家、『 幸清在小田原城中、守竹浦口、北條氏滅亡之日、蟄』領邑相州 一宮糟谷村、其後移武州鉢形領、天正』十八年十月十五日、卒 於藤田、号樹竟院殿英山』道笈居士、墓有榛澤郡藤田郷本寄居 村』善導寺後山、石碑之図在別、</p>	<p>女 北條氏直臣山角主膳正定常妻</p>	<p>邦清 千勝 改甚十郎 母新田常陸介高繁女</p>	<p>天正十年、邦清初陣、属鉢形勢、六月十九日、『於上武兩州境 神流川戰死、十九歳』異日、廿二、号』輕命義忍居士、同日、伯父 吉張亦討死、『瀧川陣是也、</p>	<p>清吉 彦九郎 改彦左衛門 母同右</p>
--	------------------------	---------------------------------	--	-----------------------------

彦二郎 從五位下左衛門尉

吉次

母猪俣彈正忠小野範宗女

兄忘上杉数世之舊交、属北條氏、為不道、与第吉重<sup>(弟)</sup>出奔岩田邑、從上杉憲政、赴上野國、上杉零落後、天正十<sup>(年)</sup>、織田信長使瀧川左近將監一益移居上州厩橋、伏東國、因之、与西上州國峯城主小幡上総介・安中城<sup>(主)</sup>主安中左近・武州倉賀野城主倉賀野淡路守・東上<sup>(州)</sup>新田金山城主<sup>(新田)</sup>由良信濃守・高山城主高<sup>(山)</sup>山遠江守・西上州木部城主木部宮内少輔・武州本<sup>(庄)</sup>庄城主本庄三河守以下相共、属滝川一益、信長被殺<sup>(之)</sup>之時、一益退去東國故、諸城主皆附北條氏、唯吉次<sup>(先)</sup>先日以背北條氏康・藤田邦房、守義、未嘗從、忍城<sup>(主)</sup>主成田下総守氏長、頻說而相勸、故吉次亦属北<sup>(條)</sup>條氏、薙髮、號玄阿、以北條陸奥守氏輝長<sup>(熊)</sup>臣中山<sup>(助)</sup>助六郎家勝入道全椿二男右京家清為嗣、後<sup>(之)</sup>号岩田玄蕃頭、

吉重 右衛門 号一右衛門

母安中主膳正女

勇氣絶倫、少年之時、有故出奔岩田邑、属武田<sup>(勝)</sup>勝頼、居甲州、成長而、甚猛兇人皆憚之、後与親族<sup>(和)</sup>和親、武田氏亡國之後、因為小幡重定親族、天正<sup>(十)</sup>十年、加瀧川一益軍中、励血戰<sup>(云)</sup>云、<sup>(云)</sup>私曰、北條記・信長記謂、於神流川戰死者<sup>(共)</sup>共非也、天正十年之戰後、与谷崎忠右衛門同<sup>(之)</sup>之奥州仕會津蒲生氏郷、領一万石、於九瓶<sup>(之)</sup>之役、有軍功<sup>(云)</sup>云、

吉張 平藏

母同吉重

天正十年六月十九日、於上武兩國境神流川戰死、

直吉 虎 後七兵工

天正十年、瀧川敗陣而、兄吉次同、北條氏政君降麾下、直吉素多力、氏政知之、未試、一日請觀其量、虎應<sup>(北)</sup>命、曳鋸斷之、衆人恐伏、氏直嘆之曰、我聞<sup>(北)</sup>七兵衛尉景清能斷鋸、今於虎親看之耳、須改名<sup>(平)</sup>七兵衛、又賜諱字、直吉天正十八年、在鉢形城<sup>(中)</sup>中、於城門戰死、

幸利 内藏 傳左衛門

從北條氏、在鉢形城中、天正十八年丑六月、前田利長<sup>(卒)</sup>卒北國兵、攻鉢形城、依城兵猪俣能登守直範異心、衆心<sup>(不)</sup>不一、利長乘之、使蜜僧竊氏邦、有緣於利<sup>(密)</sup>長、故遂和親退去城、入昌龍寺<sup>(氏邦善)</sup>寺<sup>(提所也)</sup>、薙髮号宗青、之加州、因茲、幸利亦倍從加州、終仕利長、慶<sup>(云)</sup>長頃、属前田家先鋒列、又於浅井巖在後殿<sup>(云)</sup>云、

吉

落魄寄食于清須德善寺<sup>(尾州)</sup>寺<sup>(一向宗)</sup>、傳曰、欲使後閑・岩田輩為仕祿、然為軍離散諸<sup>(國)</sup>國、不幸而不應命故、嫡家幸清、天正十八年卒、吉次蟄奥州、吉重仕蒲生氏郷、吉張天正十年戰死、<sup>(利)</sup>直吉天正十八年在鉢形於城門戰死、幸清之加州、末男吉奉拜

女  
神君、後違命流浪、亦仕薩摩守中將忠吉君』  
（松平）  
院『殿、

岩田城主

家清

右京 改玄蕃頭

家清之實父者、中山助六郎家勝入道全椿、次男也、『家清從房州氏邦、在鉢形城、天正十八年、氏邦退城之』日、衝破北國兵、直蟄秩父山中三峰山、曾在鉢形、守』虎岡城（鉢城、城也）、文祿朝鮮之役』

神君出陣于名護屋、北條美濃守氏盛、從此役、東』條紀伊守・白檜三郎兵衛（二人共）  
氏盛妹婿・岩田玄蕃頭等從』氏盛、在于此』

幕府、凱歌之後、東條・白檜兩士之越前福井、祿仕彼家、『家清性好酒、一日醉而落於馬上、損傷腕、依之、蟄武』州榛澤郡藤田邑、家清無嗣子故、養同姓河内』守子彦九郎清吉、以若林新左衛門則貞女、妻之、『使傳來家寶什器盡附焉（若林則貞女、乃家清姪）』一日從者十五人乘籃輿、來遊于武州府中邑、判』官物部祢宜宅、此時 上使板倉四郎右衛門、來』于此、傳』

神君之命（神君御書、且賜黃金）、所謂、使家清為祿仕也、家』清辞曰、雖君命忝、我腕既損傷之後、不堪採槍、『素餐野夫何為用（不受所賜金、以國用不足）、明日將歸藤田、復』命足下宜潤色也、姪等（中山助六郎、中山左助）雖疎于我、皆勇壯』也、願足下以是可聞（云、）』

傳曰、依家清落馬怪我腕損、甚非正說、猪荒依止、『左腕為

猪被嚙、滝上村感藥師佛靈夢、浴相州』温泉而、愈弓射時、矢尺不任心、剃髮號義石、板』倉氏對顏之翠年（翌）、於鉢形加仁輪屋敷卒、慶長』十三戊申年十月廿一日、号』勇進院猛譽樂醉居士、』

玄蕃頭家清從者伊東采女傳云、『

神君在府中、使板倉四郎右衛門問岩田河内守』・新田常陸介於家清、家清對曰、常陸介不知』其所終、河内守天正十八年卒、 神君賜』黃金、辞之 神君不喜故、無復問、

彦九郎 改右京 後彦左衛門 左衛門尉

清吉

實父岩田河内守幸清

實母新田常陸介高繁女

依 台命、結城秀康卿奉附屬、後浪人、『清吉宅地、郡監伊奈（忠次）備前巡察之日、聞清吉先』人為岩田領主賜宅地、『寛永二年乙丑五月十一日卒、四十二歲、火葬萱刈』本寄居村善導寺後山、築墳立碑、法号妙』休院本覺是心居士、

童名宮房 傳九郎 左衛門太郎

政吉

母者若林新左衛門則貞女 号女郎

實者上田又太郎則秀入道安樂齊女

政吉、慶長十四己酉年四月八日已上剋、生于萱刈、晚年』剃髮号宗貞、元祿四辛未年正月五日寅上剋、『八十三歲卒、即葬

善導寺西山際、号蓮乘』院岩誉宗貞居士、』  
若林則貞、比企郡松山城主上田闇礫齊家臣也、則』貞女中山  
全椿孫而、勘解由次官家範姪女也、延』寶四丙辰年十二月五  
日卒、九十九歳、墓在善導』寺後山、法号壽昌院松譽蓮慶大  
姉、』政吉之妻者、秩父郡葭田村之農夫笠原與』五兵衛若名女  
也、實與五兵衛孫女小櫃氏也、』與五兵衛富農也、以己孫為養女、  
妻政吉、實』父野州佐野邑井伊直孝末臣小櫃左次右衛』門光  
嚴女也、二女二男之母、

女初

女鍋

産名伊勢千代 新太郎 改玄蕃

清次

寛永十九壬午年三月二十五日辰上剋、生萱刈庄、』母者、農夫  
笠原與五郎女號女郎、延寶六戊午』年七月十日、於萱刈卒、七  
十歳、即葬善導寺』西山際、號智原院載誉貞運大姉、』  
清次、元禄十一年戊寅三月二十七日 卒、五十七』歳、即葬  
善導寺西山際、號亮照院本誉宗』慶居士、

正持 小佐之助

母同

季張

童名石力千代 彦太郎 覺之丞 喜内

後主鈴廣智 恒足軒

母者、小櫃右馬之助氏明女也、氏明者、兵家者流柳生』氏之  
祖、学繫劔於柳生但馬守、最為高弟、又』長鳥銃鳥之術、姓者  
源、實者今川寂淵之次男』也、有故、秘今川氏之号而号小櫃  
季張、母春女』五十五歳而、為尼號淨善尼、為黒瀧潮音之門』  
下、遂受拂子、享保三戊戌年六月二日申剋、』於藤田郷卒、年  
七十六歳、葬善導寺西山、』有碑、號證真院貞誉妙運尼、』

季張者、延寶六戊午年七月廿一日辰上剋、生萱刈』野庄

成長而已、敢就師不学』書、及壯年不能讀書、』  
季張一日以為吾先實有所由来何在阡陌之中』與漁樵游乎、是以  
出于江府、欲仕』

國朝、元禄十五壬午年三月、去萱刈野庄、来遊于東』都、于時

品川氏、依為母姓名家見北條氏之所與』季張先人之看傳來之文  
書、請為嗣、季張曰、』人各有姓有氏、不可混天之道也、縱令  
雖以之得』禄爵繼侘姓則滅自姓也、我所以去舊里、来遊于』此、

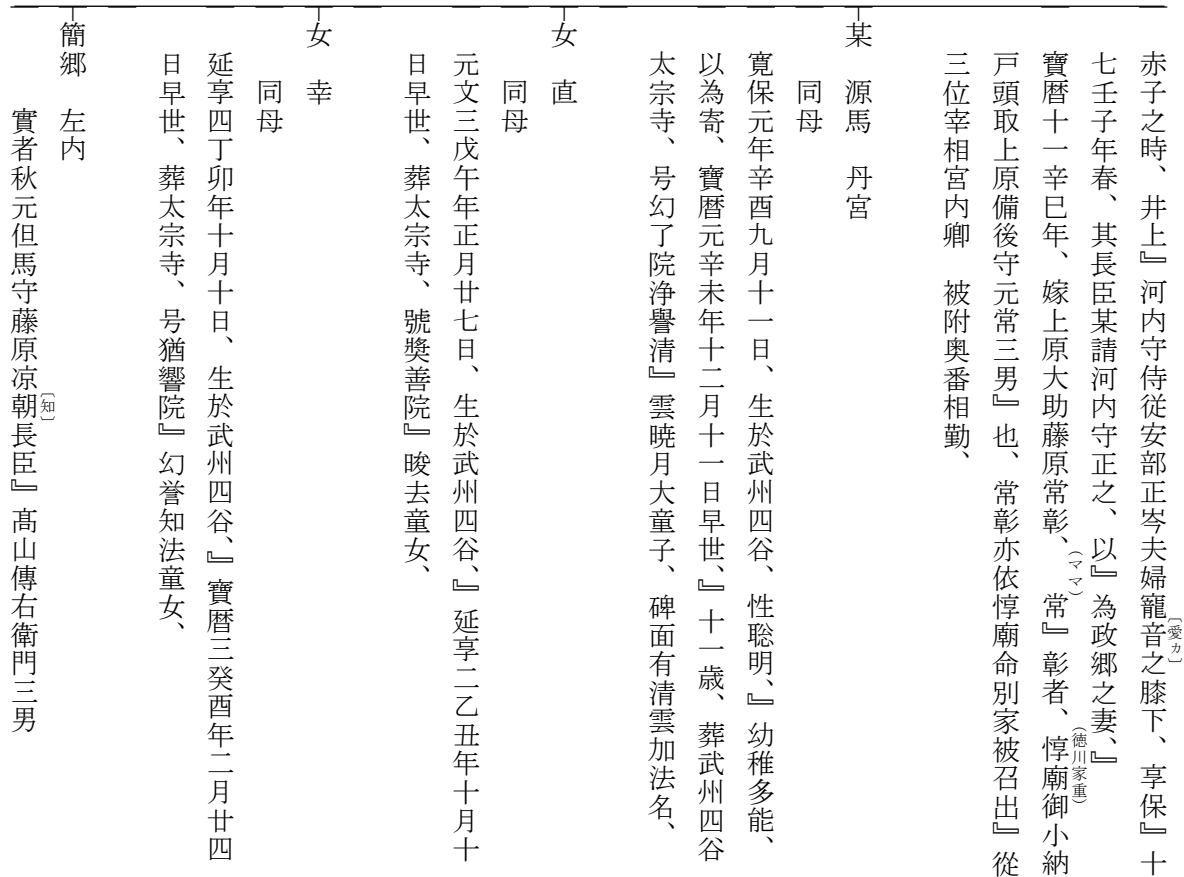
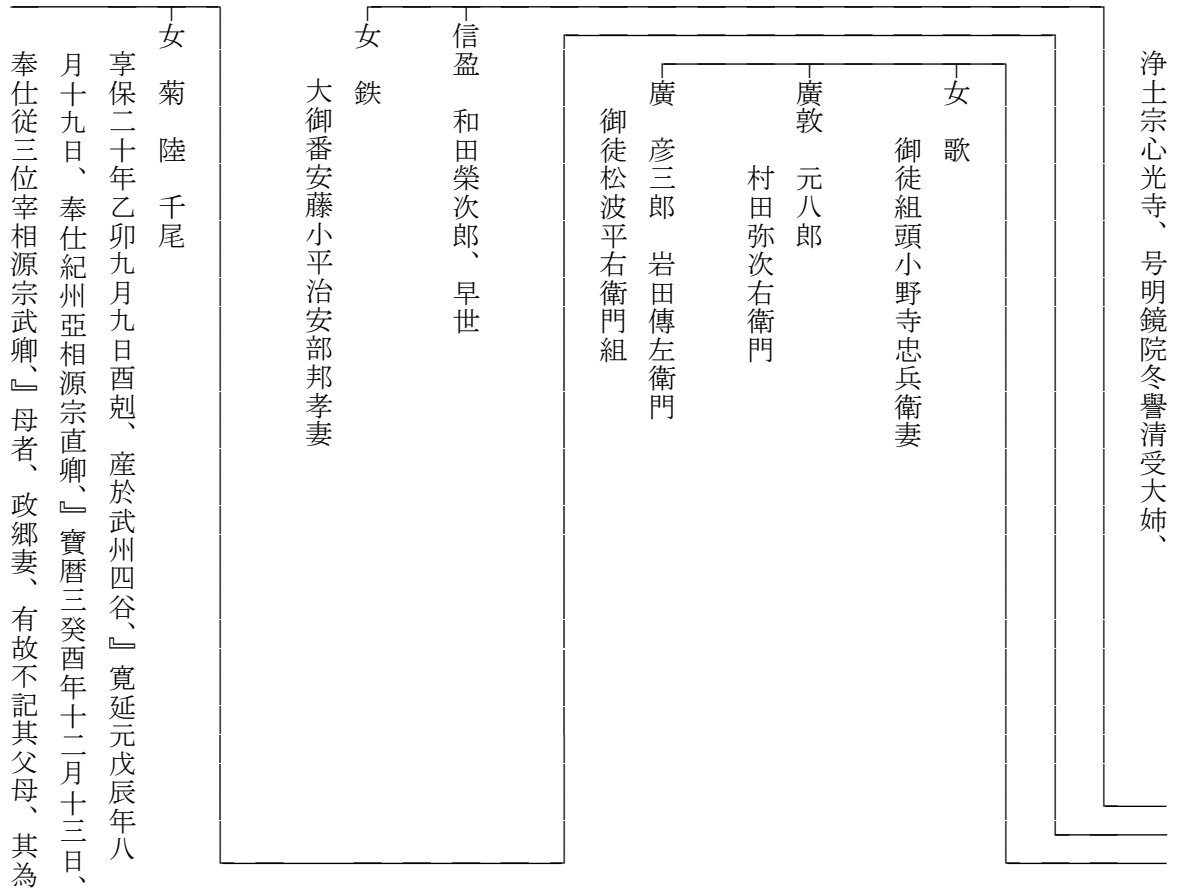
以我姓仕幕府冀耳也、不應其請、同年十一月、』  
憲廟先隊之騎士、属横田甚右衛門由松、厥後、』鳥居久大夫元茂

・三浦監物貞次、歷仕』  
文廟德川家・章廟德川家繼、属齋藤帶刀利久、至』

德廟、高木伊勢守守興、彦坂壹岐守重英、土屋』刑部高直等賜  
食邑常州河内郡江戸崎領之内、』同茨城郡完戸領之中、都合二

<p>百三十二石四斗五』升一合三夕六才、』享保八癸卯年五月、致仕而、使次子喜内政郷襲、』號主鈴<small>耻不自役、祖先不用通字、</small>、號恒足軒、』寶曆十二年九月二十五日、八拾八歳卒、號與治院殿』誠譽丹阿惠鑑大居士、葬武州四谷浄土宗』太宗寺、</p>	<p>廣雄 童名猪助</p>	<p>元禄八乙亥年九月二十三日卯刻、於大里郡生、』長而後、中山勘解由直正名一学直正曰、氏族無可疎之』義矣、且以季張之命、我何以辞之、則名以一学』母者、阿部豊後守家臣竹井甚五右衛門紀信親』女<small>三女、</small>實者正親第小尾新右衛門正信女也、寛延』三庚午年十二月十四日午刻卒、葬武州四谷浄土』宗太宗寺、七十四歳、号』 香修院殿戒譽精薰大姉、</p>	<p>政郷 母同前</p> <p>元禄十一年戊寅八月十日子刻、於武州大里郡産、』後改政逸、安永八亥年十一月十七日八十三歳卒、四谷』浄土宗葬太宗寺、號松應院高誉西岸柳下居』士、</p>	<p>女 本 後峯</p>
--	--------------------	---	---	-------------------

<p>元禄十五壬午年五月十九日亥刻、生於大里郡、』同母、<small>(イイイ)</small> 小從人和田大七郎源重光妻<small>後憚改種光、</small>』享保十六年辛亥年九月廿八日、種光卒、葬青山青』原寺、即日薙髮、号貞岩院、明和四年正月十日、』六十六歳卒、號貞岩院殿心操壽松法燈尼、武』州葬萱刈莊葬正龍寺、</p>	<p>女 春 岩 寶永元年甲申三月四日、生于武陵四谷、』同母、<small>(イイイ)</small> 黒田豊前守丹治比直重長臣田原要人』藤原忠興妻、享保七壬寅年八月廿八日卒、葬三縁山中』心光院、号法壽院殿摂光理巖大姉、</p>	<p>女 律 政井 寶永四丁亥年四月九日辰刻生、 奉仕松平石見守源乘穩、</p>	<p>女 富 見勢 岩見 宮河 寶永七庚寅年八月十三日子刻、生于武州四谷、』母同、奉仕尾州黄門源宗勝卿・睦卿、<small>(宗脱カ)</small></p>	<p>女 源 同母、寶曆十一年辛巳十一月廿四日卒、葬小石川』</p>
--	--	--	---	--



寶曆二壬申年十月、養而為子、『寶曆三癸酉年七月廿七日卒、葬  
太宗寺、号』廉夫院黨蒼簡郷居士、

知菊 仁三郎 喜内

政慰

同母

寶曆二<sup>壬</sup>申年九月十一日、生於武州四谷、有故安永六<sup>丁</sup>『<sup>酉</sup>年隱  
居、四十二歲<sup>ニ</sup>而卒、寛政五癸丑年七月十八日』葬太宗寺、號  
單昌院仰蒼直往居士、

左膳

忠恕

安永六丁酉年養而為子、安永九<sup>庚</sup>子年十二月『隱居、勝手<sup>ニ</sup>付、  
其後牛込榎町<sup>ニ</sup>住居、常好而』遊書多年、寛政十一<sup>己</sup>未年春三  
月上京而』青蓮院宮為御直第、号夫山、

【史料二 丹治姓岩田系図（小鹿野本）】 (7)

丹治姓 家紋丸ノ内丹一文字、『或ハ五枚葉根笹<sup>ヲ</sup>モ紋トス、』

岩田系圖 亦丸ノ内一文字或ハ角』内蔦、

本國武藏

本國武藏國秩父郡白鳥庄岩田村、岩田ハ邑名』而、在於武藏國秩父郡、  
土人曰、一ノ大石在田邊、号<sup>ニ</sup>岩田、以岩田為稱號者ハ、第十八代丹治  
正廣始』住其所、在館舍跡、亦岩田ノ山有墟、吉例年毎』三元日以一羹・

二麴饗應之、自祖至今用此例、『丹黨氏神勲八等正一位丹生大明神、在  
於』岩田邑毎年九月十九日、為祭禮、亦同邑野』上村勸請丹生社毎年十  
二月朔日、加美郡安保』村九月十九日、高麗郡加治郷勸請ノ丹生社毎  
年二月十六日、秩父郡廣瀬村勸請丹生社毎年』祭月祭日<sup>（マヤ）</sup>上昔祭日ニハ、  
同郡薄村藥師』堂地内ニ丹生社有、毎年三月十六日祭禮有之、』惣<sup>テ</sup>丹黨  
在邑<sup>ニハ</sup>必齊祭丹生社云、

第二十九代 檜隈高日王子

宣化天皇

諱武小廣國押盾尊、繼體帝第二ノ子、『母ハ日<sup>ニ</sup>日子媛<sup>一</sup>、尾張  
連草香女、』雄略帝十二年<sup>戊</sup>申生、安閑帝二年<sup>乙</sup>卯』十二月十二  
日即位、六十八<sup>異曰、安閑天皇二年』上鏡、  
乙卯即位、群臣奏<sup>ニ</sup>叙<sup>ヲ</sup></sup>、二年春正月遷下都大和國高  
市郡』檜隈廬入野<sup>上</sup>、夏五月詔曰、食ハ天下本也、『黄金萬貫  
不可療飢、白玉千箱何能』救冷收藏穀稼蓄積儲糧邊設凶』年  
厚饗良容修造宮家那津ノ口、『四年春二月<sup>甲</sup>午日崩時、年七十  
三、葬ニ大和』國桃花鳥坂上陵<sup>一</sup>、

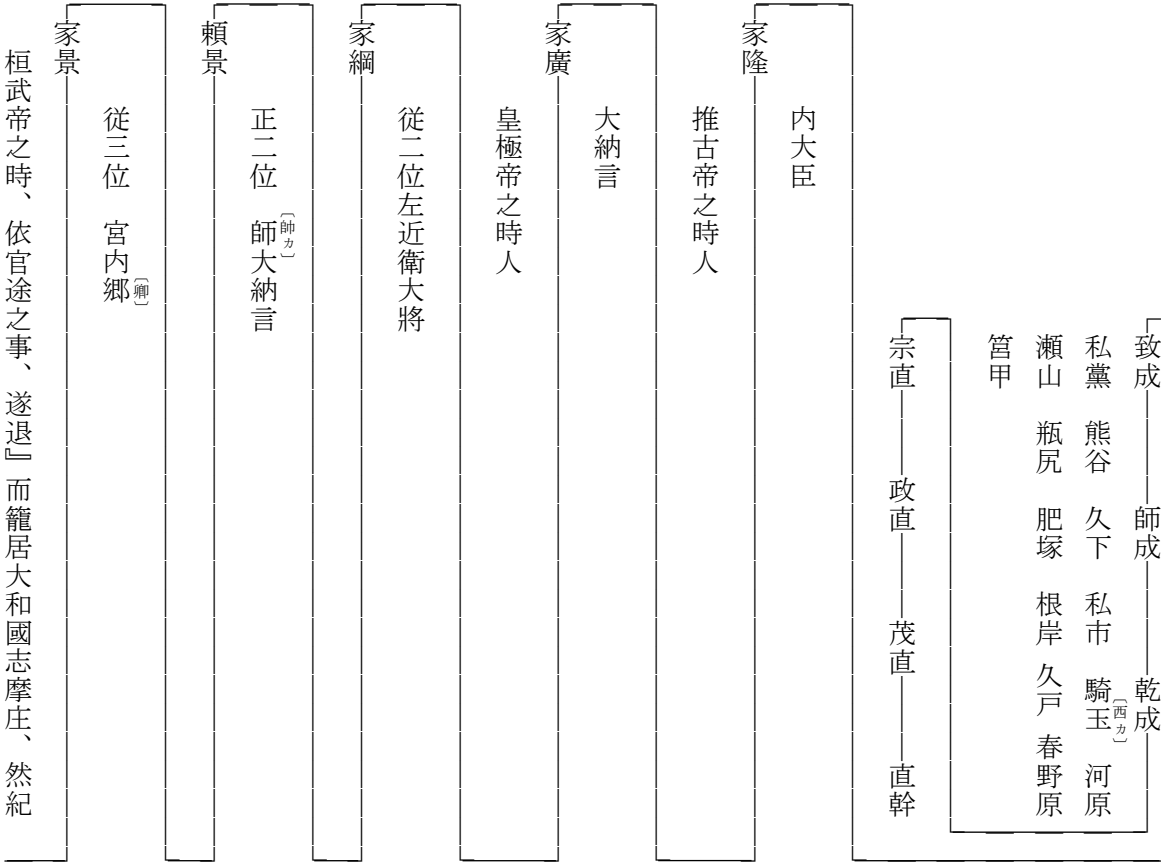
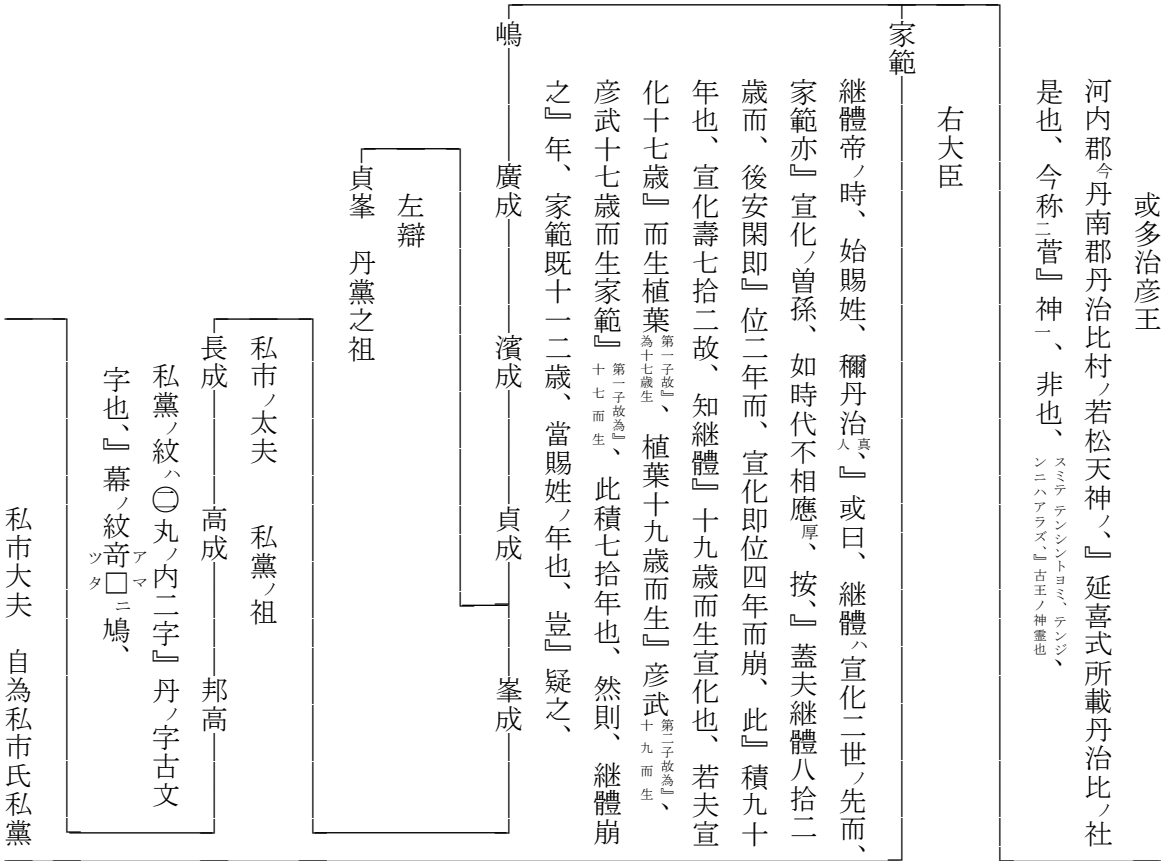
上殖葉皇子

母橘ノ仲皇后、亦ノ名梔子、是丹比公・偉那公』凡二姓ノ先也、

十市王

一名彦武王

多治比古王





州』之所領如元、

家義

太郎 宮内郷

嵯峨帝之時、賜大和國淡田庄而、住』其所<sup>ス</sup>、所謂丹姓大明神、即家義』之神靈也、傳曰、其靈引導僧空海』於高野山、其體似獵人故是謂犬』山師、<sup>按</sup>引導空海之事、似丹生明』神<sup>丹生明神所、由來遠矣</sup>、今以實理推之、其時』家義在和州而、近高野、因生前、』合力於空海故、以其感志報其』功、沒後追崇之而、爲明神<sup>乎</sup>、』生・姓音相通故、号丹姓以擬丹生之』神<sup>乎</sup>、

<sup>（好運）</sup>  
樋口幸安<sup>カ</sup>記<sup>ニ</sup>曰、秋元但馬守喬朝長臣岩田彦助ノ』林家ノ門仁トテ漢学ヲ好テ、幸安<sup>カ</sup>撰記<sup>ニ</sup>書添』タリ、中山家ノ系圖トハ小違アリ、

武信

陽成帝元慶元年、配流武州、遂開』發秩父郡・加美郡其外一ノ井・加治』等之所而、押領之、自是、始零落<sup>テ</sup>』関東、後蒙勅免、皈洛、

峯信

栗名ノ丹二

樋口幸安撰、武家高名記曰<sup>武家</sup>  
<sup>高名</sup>』<sup>記板行ノ書ニ、テ五十冊有之</sup>、薦野苗字系傳曰、宮内』郷家義之孫丹治武信、依陽成』帝之勅、下向武州、領加治郷、是武』州丹黨之随一也、其子峯信下九』州、住筑前國糟屋

郷薦野庄、城』養徳山、自是、称薦野苗氏、按スルニ』  
<sup>スルニトハ、岩田</sup>  
<sup>彦助和衷</sup>カ詞ナリ、然則、峯信之後、武與筑』立兩家<sup>乎</sup>、

峯時

丹貫主

始住関東<sup>按、自是爲武、按トハ岩田彦助</sup>  
<sup>藏國</sup>』住人<sup>カ</sup>和衷カ詞也、

武藏守

峯房

是ヨリ季左書<sup>スエ</sup>ハ、新寄<sup>（寄）</sup>居村岩田<sup>カ</sup>家ニ』雨漏朽タル中ヨリ北條家其外ノ御』文書無恙ヲ出タル中ヨリ、正真ノ書』説ナリ、』丹黨ノ枝葉如左書、岩田恒足軒謹』誌、恒足軒<sup>カ</sup>高祖父天正十八年』迄岩田ニ住スル也、

武経

始爲秩父郡官領、

武時

丹貫主

武峯

異ニ曰、武平 冠者、第四ノ郎也、  
<sup>ヲノココ</sup>

大夫 二大夫

經房 丹三鬼者<sup>(冠)</sup>

中村 秩父郡安部御室村  
大河原領ト云、

大河原 岡田ト云所ハ、大宮ヨリ南ノ方ニ有之  
由一兩日ハ已前聞之 丹生御社有之哉

岡田 下中村大宮ノ近所ニテハ、  
昔中村殿之儀御座候所

下中村

竹淵 塩屋<sup>塩屋、榛次郎</sup>  
シヲノヤ 丹生御社有之、

古郡<sup>那賀郡也</sup> 塩屋<sup>近所ニ右同所、</sup>

坂田 大窪 横瀨

横脛 以上十六苗氏ノ祖也、

本田<sup>ホンダ</sup> 男衾郡 弥郡<sup>ヤノコハラ</sup>  
今誤リテ、  
ヤノコハリト云、

長房 薄次郎 恒足軒<sup>カ</sup>曰、長房ノ館舎ノ所ハ『秩父薄村薬師堂背ト  
被察、』其儀ハ丹生御社有其所、民老ニ問ニ 丹生  
御社ハ地主ト云事、』薬師ヨリ前ト云、

薄 織原 織原ハ本奇居ノ川向、織原村也、』本奇居ハ榛沢郡、  
織原ハ秩父』郡、織原村浄光寺本尊ノ臺』座ニ秩父郡  
白鳥ノ庄織原村』トアリ、

以上二苗氏也、

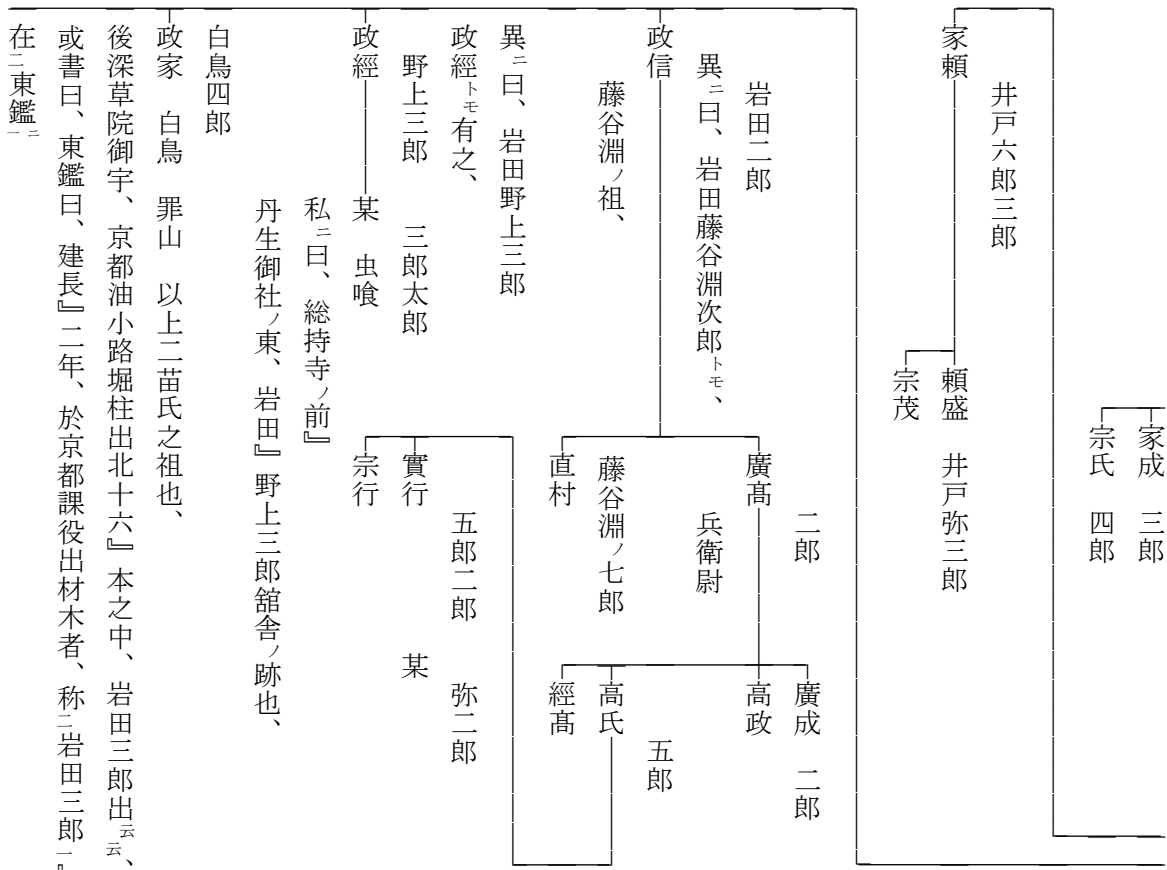
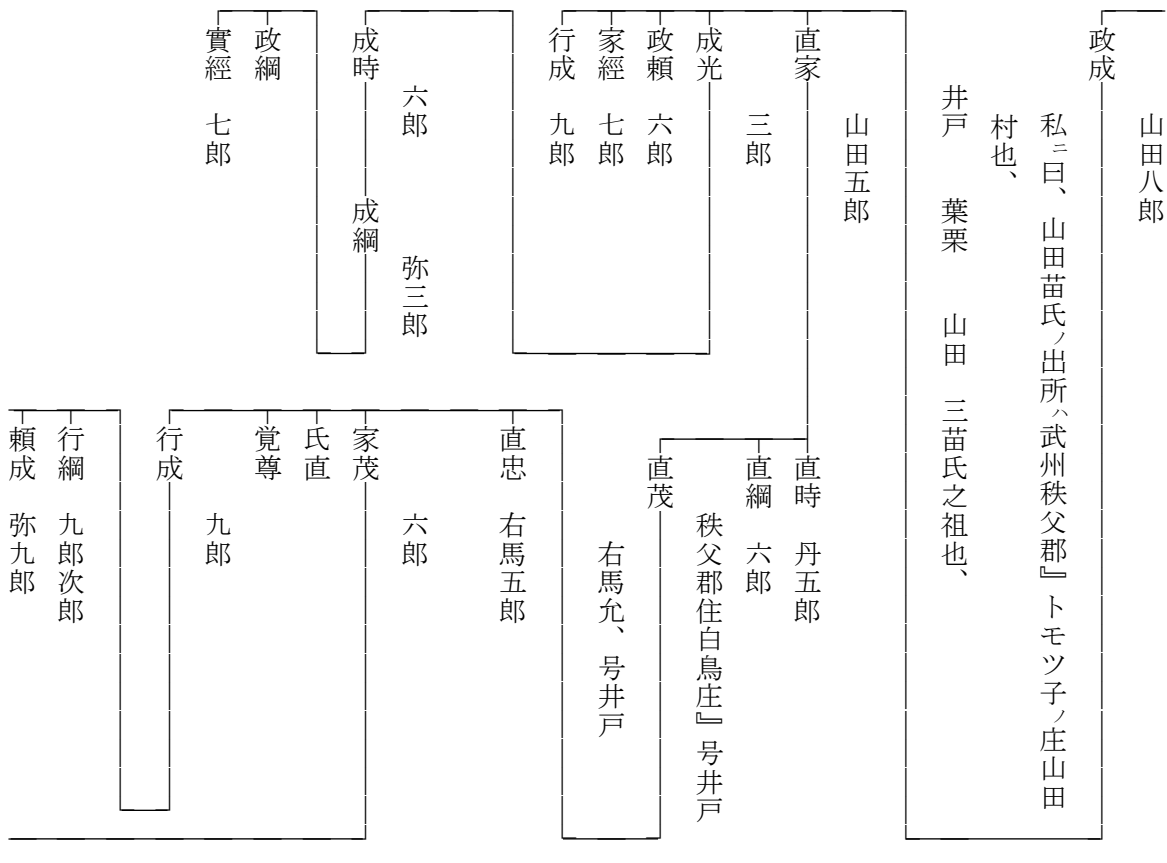
基房 秩父黒丹五、或曰、勅使河原ノ黒丹五郎<sup>トモ</sup>、

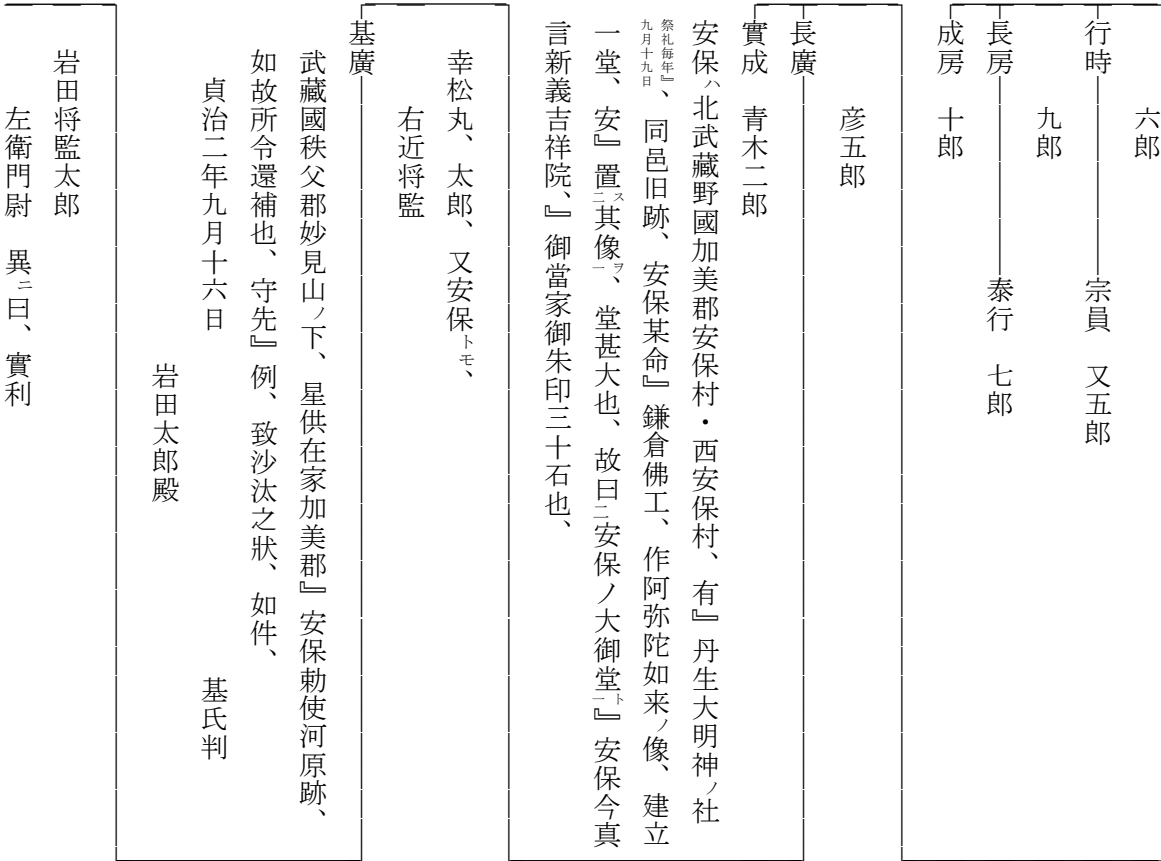
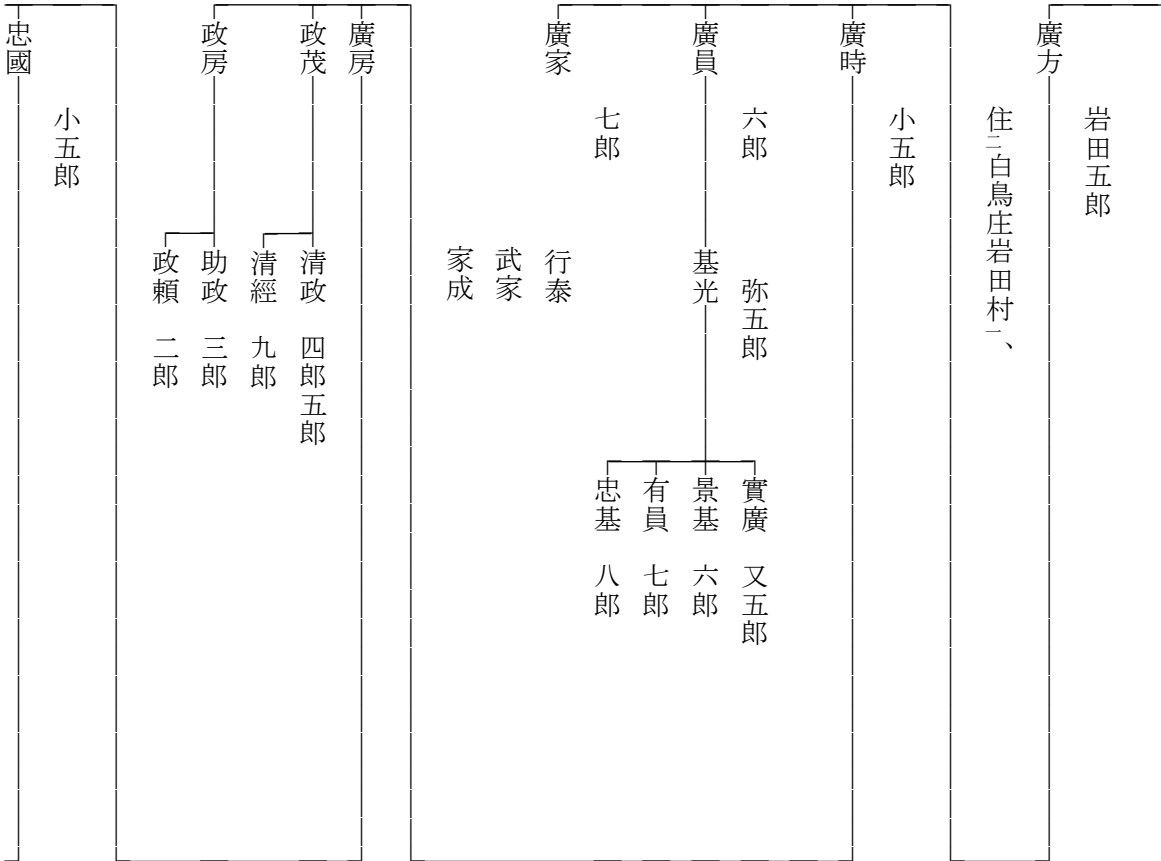
勅使河原<sup>テシカハラ</sup> 上州新田郡  
堀口<sup>ホリクチ</sup> ミナミアラキ  
南荒居

高麗郡<sup>アラキ</sup> 新里<sup>ニイサト</sup> 加美郡  
由良<sup>ユラ</sup> 上州新田郡  
安保<sup>アフ</sup> 加美郡

青木<sup>アヲキ</sup> 長濱<sup>ナガハマ</sup> 榛沢<sup>ハシサハ</sup>  
瀧瀬<sup>タギセ</sup> 加美郡 小嶋<sup>コシマ</sup> 榛沢郡  
中山道本庄ノ脇也、

	志水	加治 <sup>カチ</sup>	高麗 <sup>コマ</sup>
	以上十四苗氏祖也 <sup>ソ</sup>		
	俊貞	加治三郎左衛門尉、『左衛門尉』	
	基氏	桐原孫三、『左衛門尉』	
	基兼	判乃三郎	
	行房	白鳥ノ七郎	七丹二郎
		基政	
則政	黒谷五	秩父黒谷養子タリ、	号左衛門尉
	士ノ狩	御供ニ参、為曾我時宗被疵云、	旧記ニ曰、頼朝富
政光	山田六郎	八カ	
	岩田七郎		
政廣			
東鑑第二十五ニ曰、承久三年六月廿四日、於三字治川ノ上ニ、首一	討捕 <sup>政廣 鎌倉勢</sup>	是在金持兵衛ノ	日記ニ、此時鎌倉勢ノ中蒙疵ノ中、岩田
七郎トアリ、	岩田八郎ハ山田八郎歟、	與岩田七郎同属鎌倉勢、	於
同所首二討、	同二郎、亦得首二、	是皆載金持兵衛之日記、	





<p>實長 <small>（足利）</small> 仕定勝院義持將軍之時、鎌倉足利』左馬頭持氏之時、有應永二十四丁酉歲』上杉氏憲入道禪秀亂之舊記<small>（ハヤ）</small></p> <p>光春 將監次郎 異二曰、實春 安保丹後守</p> <p>實季 將監三郎 上野介</p>	<p>女 藤田野太郎 長門守小野宗員妻 藤田系圖二曰、岩田左衛門實利カ一女、藤田』野太郎宗員後ニ改長門守、岩田實利入道』以一跡授宗員後ニ、宗員聞三入道ノ有ニ實子一、』以ニ岩田地二授之、是永享年中ノ頃、岩田太郎』三郎<small>改式部少輔ト</small>丹治比實員云、</p> <p>實員 岩田太郎三郎 式部少輔是也、 岩田ノ内枝郷住、吉田館ノ跡、今道光』寺東ノ方ノ畠也、</p>	<p>忠重 九郎、帶刀先生 母猪股太郎女、縁族タルニヨツテ猪股』称号賜テ、猪股トモ云、本姓丹治也、』猪股ハ小野姓、</p>
<p>僧 参内之良堂和尚 八郎五郎</p> <p>忠幸 義幸 三郎、對馬守</p>	<p>對馬守、從六位下 義幸ハ丹ノトウ九郎忠重ノ三男也、</p> <p>義幸 世俗ニ傳言フ岩田ノ内、分レ三ニ、上郷・中郷・下郷ト言フ、』對州君ノ所住言ニ下郷ト、仍人稱ニ堯田殿ト、祈禱』所満光寺ハ堯田有之、号ニ堯田山ト、道光寺ハ』吉田ニ在レ之、号吉田山、對馬守戒名臨田浄室』居士并其妻ハ香蓮貞室大姉、右夫婦ノ』位牌在ニ岩田邑ニ、<small>真言宗 臨濟宗 妙心寺派</small>満光寺・道光寺・瑞岩寺、其外在ニ岩田領地所々寺ニ</p> <p>岩田孫次郎</p>	<p>幸重 女 人見越前守小野安利妻 安利ハ上杉官領家武州榛沢郡人見村代々ノ』住人也、人見村ハ中山道深谷驛邊也、』曾孫人見何某、上杉左兵衛佐藤原吉憲』</p>

家臣也、今人見代々屋鋪、時宗ノ寺一乗』寺ト云、人見代々墓所在、人見嫡孫加賀』宰相ノ家ニ人見才三郎ト云有之、

女 本田筑前守貞信妻

〔卿〕

本田ハ丹治氏也、頼朝郷以来男衾村本』田ニ居住ス、西本田・東本田、東本田ハ畠山重』忠ノ家臣トナリ、西本田嶋津家臣トナル、大御』番本田藤十郎、今幕府士西本田ニアリ、

女 諏訪部三河守源光長妻

諏訪部ハ信州源氏、元ハ諏訪ノ神孫』諏訪氏也、紋楮葉三露、楮本字ナリ、』紙ハ俗字也、梶ノ葉俗也、

房幸 岩田三郎六郎

岩田三郎六郎 伊勢守

房幸

實ハ對馬守義幸末子、

童名彦太郎 剃髮號善譽居士

岩田土佐守

幸勝

母ハ藤田中務太輔女、属ニ上杉家ニ、』麻生太郎左衛門勝永カ家書曰 勝永ハ岩田也 幸勝ノ與子也 土佐』幸勝養レ兒有レ法、飲食常撰毒与能當醫』家之節、故数子皆健也、又平生扛重攀高、』故成長之後、盡多力剛強也、且雖不要博』学、毎々説古人忠義行、使兒等記憶之、』故顯勇猛云、故所其教、所其養、義守』己、勇過人、由是觀之、

父ノ慈子豈可』不慎之乎、』

岩田邑ノ内、以永樂五百八貫八百緡構』菟裘 俗今日、金尾塘山家臣麻生守之、』麻布ハ宇都宮別藤原也、』九拾七歳、戒名善誉宗真居士、異ニ曰、』真公居士、

女 上州小幡國峯城主、小幡平太郎重純妻、

此小ハタハ御簾本小幡上総介先祖也、

重行 櫛原奎之助、 枋原俗字也、櫛原秩父』郡藤矢淵村ニ櫛原山ト云アリ、岩田苗氏』別レ也、 此末上州沼田新田伊賀

守』家臣、伊賀守家断絶、其後』公儀御扶持人ト成、吾妻大笹御関所』番人被 仰付、櫛原十良左衛門ト申也、

女 本庄城主本庄藤太郎藤政妻、

中山道兒玉郡兒玉黨藤原ノ末也、

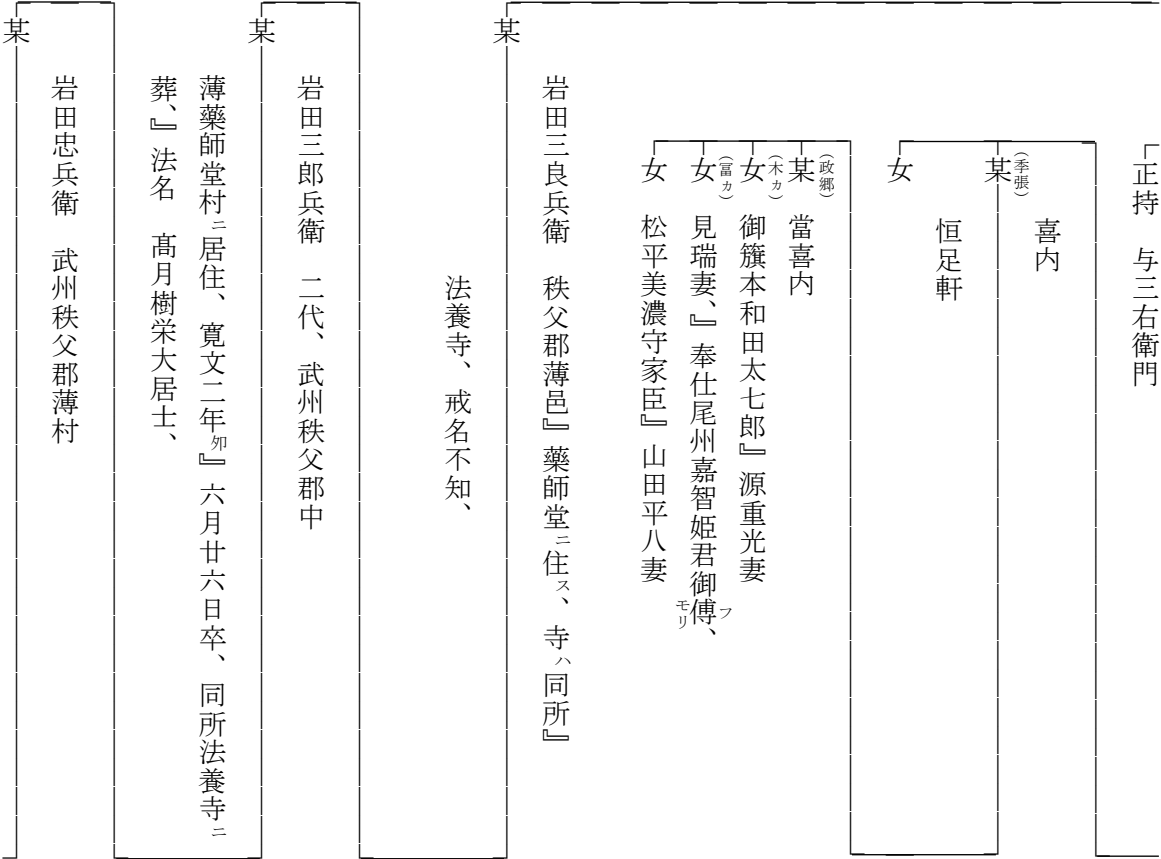
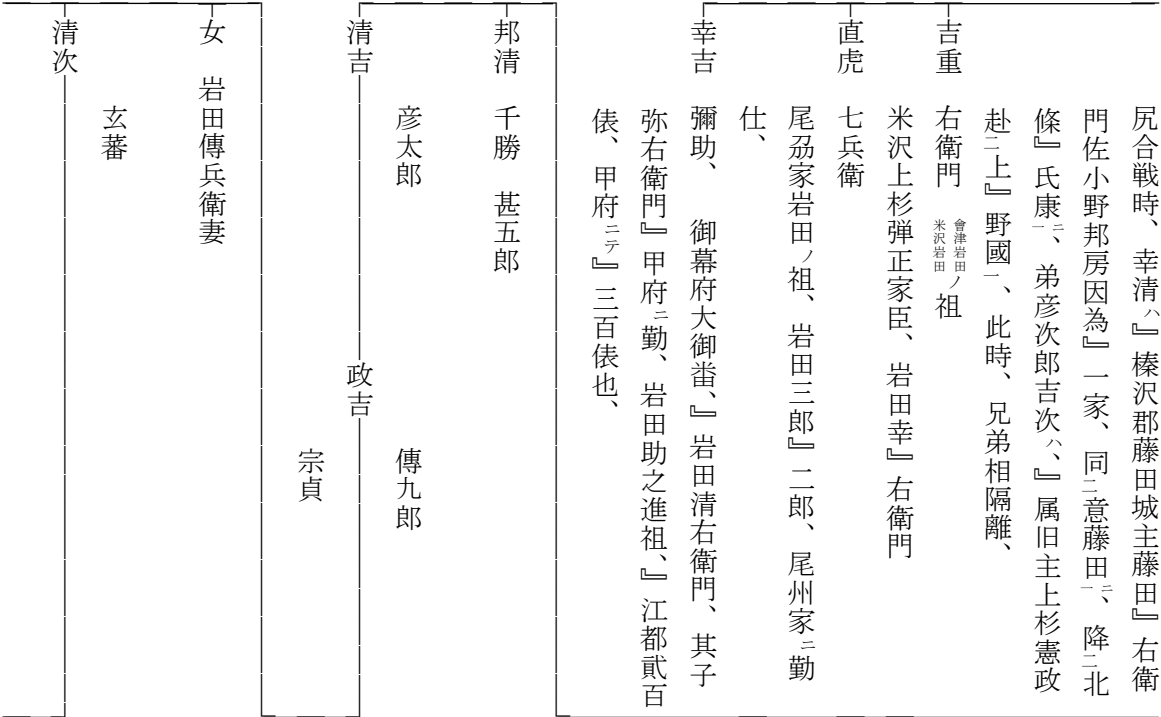
號猪腓和泉守

宗幸

猪腓ニ實城・末家ト二家有、』宗幸ハ末家也、家紋憚之、』母ハ猪腓彈正忠娘、加賀之』家中猪腓齋宮祖也、岩田』猪腓鉢形城時分也、代々』一家タリ、

幸清 左衛門太郎、河内守

母ハ猪腓彈正忠小野定平女、』定平ハ代々猪腓ノ城主ナリ、』数代属上杉家幕下有』軍功、三日



<p>藥師堂<sup>ニ</sup>居住、寛文三<sup>癸卯</sup>歲十<sup>（付箋）</sup>月十九日卒、行年八拾歲、 小鹿野葬<sup>ニ</sup>鳳林寺<sup>ニ</sup>、法名 智寒道徹居士、</p>	<p>岩田忠左衛門 武州秩父郡小鹿 淨忠 野<sup>ニ</sup>居住、天和三<sup>癸亥</sup>歲閏五月十<sup>（付箋）</sup>日卒、行年七拾七歲、同 所葬<sup>ニ</sup>十輪寺<sup>（マア）</sup>、法名 寂室宗入居士、</p>	<p>某 岩田喜左衛門 剃髮<sup>シテ</sup>號淨快<sup>ト</sup>、宝永三天<sup>（丙戌）</sup>三月四日、行歲<sup>（付箋）</sup>七十五歲卒、 法名鏡心淨懷大法師、右同寺、同人妻享保元<sup>丙申</sup>年八月廿九 日<sup>（付箋）</sup>、七十七歲、心月正清大姉、右同寺、 某 藺田長太輔 秩父郡白鳥庄<sup>（付箋）</sup>大宮妙見宮神主方<sup>（付箋）</sup>養子<sup>ト</sup>成、 御朱印五拾七石頂戴、</p>	<p>某 岩田喜右衛門 武啓 岩田弥右衛門 元禄四年<sup>辛未</sup>二月廿二日、岩田喜右衛門三十三歲、<sup>（付箋）</sup>前歲霜月九 日、同町打於<sup>（付箋）</sup>吉田新右衛門・出浦氏<sup>（付箋）</sup>佐兵衛兩人、夫故歿死、 法名權大僧都法印常覺、<sup>（付箋）</sup>葬十輪寺、跡目弟岩田彌右衛門武啓、 妻父<sup>（付箋）</sup>田嶋四郎兵衛、右同寺、</p>
---	--	---	---

<p>某 岩田彌五左衛門</p>	<p>妻隣出浦吉左衛門息女、享保<sup>（付箋）</sup>年八月<sup>（付箋）</sup>「出浦吉左衛門者、隣 出浦祖也」廿日卒、葬十輪寺、法名本巖圓空大法師、<sup>（付箋）</sup>同人 妻享保<sup>（付箋）</sup>年十一月七日卒、法名<sup>（付箋）</sup>玉芳妙貞大姉<sup>（俗名タギ、）</sup> 女 菊池伊左衛門妻 女 淺見忠八妻</p>	<p>某 淺見喜右衛門 右衛門督様御勘定勤仕、 樋口半藏養子タリ 某 樋口定八 御本丸御徒勤仕、 某 岩田藤左衛門</p>	<p>武啓 岩田弥右衛門 喜右衛門養子タリ 正雲 出家、中年<sup>（付箋）</sup>死、 女</p>
------------------	---	---	---



<p>女 秩父薄常木村多比良市之丞妻</p>	<p>女 小鹿野邑横田八弥妻</p> <p>岩田忠五郎</p>	<p>某 妻大宮町新井源右衛門息女、『寛保元<sup>辛酉</sup>十一月廿日卒、葬十輪寺、法名』葉林道散居士、妻安永三<sup>甲午</sup>天七月』十四日卒、法名了覺智貞大姉<sup>俗名ベン</sup>、</p>	<p>女 大宮村新井養宜妻</p> <p>小鹿野吉田藤太夫養子</p>	<p>某 吉田藤八郎</p> <p>後出浦武兵衛改、延享二<sup>丑</sup>年十一月十八日』卒、法名清昇昇院淨智日恵居士、</p> <p>細川玄蕃頭方ニ勤仕ノ処、討傍輩、大坂<sup>エ</sup>引籠病死、</p>	<p>將美 矢部仙右衛門</p> <p>御先手與力勤仕、</p> <p>母ハ御天守番鈴木十右衛門女、</p>
----------------------------	-------------------------------------	---	---	---	--

<p>女 矢部友次郎</p> <p>寛政年中松原供右衛門ト相成、江戸八町』堀ニ居住、與力勤仕、</p>	<p>某 岩田吉五郎行義</p> <p>武刃秩父郡小鹿野村居住、所持高三石六斗』八舛七合、妻下小鹿野村佐藤氏女「佐藤佐兵治娘」一女有<sup>付妻</sup>テ病死、葬十輪寺、法名真空宗鏡大姉<sup>俗名ミツ</sup>、後妻同郡上田野村字戸沼ノ住、鉢形』北條安房守氏郡家臣之末、三上刑部末養』三上角平息女ナリ、子三人有リ、父角平尊明者、『宝曆十二<sup>辛未</sup>年七月十三日卒、法名』大心了圓居士、行義文化八<sup>辛未</sup>年八月十二日、』行年八十六歳卒、葬十輪寺、法名』諦翁行義居士、後妻文政四<sup>辛巳</sup>年九月廿三日卒、行歳七十六、法名』阿光真照大姉<sup>俗名モン</sup>、</p>	<p>女 小鹿野村字新井田嶋用八妻、行歳八十』卒、葬下飯田村光源院、文化十<sup>癸酉</sup>年』二月十日、法名法性智界大姉<sup>俗名ソコ</sup>、</p>	<p>女 江戸御本丸安定院様御附』御奉公仕、病死、法名』養清院淨譽正榮大姉、』寛政五癸丑年九月朔日卒<sup>俗名スマ</sup>、</p>
---	--	---	--

某	岩田八右衛門
	江戸本所新町屋居住、寛政十 <sup>〔戌〕</sup> 年五月廿『四日、行歳七十八卒、法名一翁心瑞法師、
女	江戸 <sup>〔ママ〕</sup> テ川明神下住、子三人有リ、
	岩田源左エ門
某	父八右エ門跡式相續仕候、一女有リ、天保『二 <sup>卯辛</sup> 年二月八日、岩田喜左エ門嘉重』此系圖一卷 <sup>ヲ</sup> 別 <sup>ケ</sup> 写讓ナリ、
	秩父大宮町高野幸七妻、一子有リ、高野又兵衛妻井上藤右 <sup>同町</sup> エ門娘、
女	岩田仙助
某	安永二 <sup>巳</sup> 歳五月廿二日、行歳九歳卒、法名『心月智凉童子、
女	大宮町岩田藤右エ門妻、一女〇有 <sup>〇一男</sup> テ、同所横瀬村字中柄佐』加

某	藤吉太郎妻名ルノ、子三人有リ、一男岩田菊治良』世次ナリ、文化十一 <sup>〔戌甲〕</sup> 稔二月十九日卒、葬金仙寺、』法名中室玄春大姉 <sup>俗名、キン</sup>
	岩田彌五左エ門
某	寛政四 <sup>子壬</sup> 天六月二日、行歳二十五卒、法名『蘭山秀保居士、
女	渡邊伊兵衛安義妻
勝	小鹿野村住、所持高十九石、村役組頭、
	渡邊周藏
嘉重	右同行
嘉重	岩田喜左衛門
	妻同町渡邊傳左エ門娘、一女一男有 <sup>テ</sup> 、離』別、後妻同郡横瀬村字根子谷守屋茂右エ』門息女 <sup>〔ママ〕</sup> 文政十 <sup>丁亥</sup> 年、村内 <sup>〔寄〕</sup> ニ而出入出来、』若年 <sup>〔寄〕</sup> 奇林肥後守様御役所ニ而、長百姓 <sup>ト</sup> 相成、』祖々父彌五左エ門十七ヶ村御割元役四ヶ國酒奉行』役勤仕候書物差出シ候所、其村 <sup>ニ</sup> おゐて旧家に』無紛 <sup>ニ</sup> 付 <sup>テ</sup> 、長と被仰候、

女	享和三 <sup>癸亥</sup> 天六月廿七日、行歳三歳卒、『法名青蓮慈芳童女 <sup>俗名コウ</sup>
某	岩田直吉
女	文化壬申年十月六日、行年二歳卒、法名『玉室誓光童女、俗名トキ、
某	文化十三 <sup>（丙子）</sup> 年十一月十二日、行年四歳卒、法名『観月轉輪童子、俗名乙藏、
某	岩田勝藏
女	
某	岩田和助
某	岩田米之助
（後略） （8）	

## 註

- (1) 岩田氏を含む秩父地方の丹党武士団については、井上幸二「秩父丹党考」、『埼玉史談』八・四・五、一九三七年）、『新編埼玉県史 通史編1・2』（一九八七・八八年）、井上要『秩父丹党考』（埼玉新聞社、一九九三。初出一九九一年）等参照。近年の関連業績としては、菱沼一憲「中世秩父の地域社会構造」、『埼玉地方史』七五、二〇一九年）、根ヶ山泰史「丹党中村氏・大河原氏西遷の基礎的考察」、『紀要（埼玉県立歴史と民俗の博物館）』一〇、二〇一六年）等が挙げられる。なお本稿では、著書・論文名の副題は原則として割愛する。
- (2) 森田真一「禅宗史料からみた東国の領主」、『群馬県立歴史博物館紀要』三〇、二〇〇九年）、同「戦国前期武蔵国秩父郡における武家権力」、『群馬文化』三四四、二〇二一年）。
- (3) 新井浩文・根ヶ山泰史「丹党岩田氏に関する新出史料」、『文書館紀要（埼玉県立文書館）』三三、二〇一九年。以下「旧稿」とする。なお、その後に本史料群を取り上げた主な研究業績として、鉢形歴史研究会編・発行『鉢形領内に遺された戦国史料集 第三集 本編』『同 別編』（二〇二一年）、高橋稔「戦国時代の岩田氏」、『埼玉史談』六九―二、二〇二四年）を挙げておきたい。
- (4) 前掲註(1)論文で井上幸二氏が言及した岩田系図は、『小鹿野町文書目録』（小鹿野町教育委員会・小鹿野町文化財審議委員会、一九八一年）所収「岩田家文書」の文書番号一六六「丹治姓系図一卷（現代迄）」と同一本とみられる。旧稿ではこれを小鹿野町教育委員会社会教育課編『岩田家文書(二)』（小鹿野町、二〇〇二年）に釈文が掲載された系図三点（同書一四一「丹治姓岩田系図 計三巻」）の内に含まれると想定したが、現地調査の結果、前者と後三者は別本で、前者の現代に至る系図は依然未翻刻であることが判明した。以下、本稿で「小鹿野本」と呼称する場合、前者の現代に至る系図一巻を指すものとする。

(5) 凡例は次のとおり。

- ・ 釈文の漢字は、諸本の比較分析を試みる本稿の趣旨に鑑み、可能な限り原文どおりの字体を反映するよう努めた。ただし異体字は、必ずしも忠実に再現できなかった箇所がある。

- ・ 釈文には、新たに読点（、）、並列点（・）を加えた。

- ・ 傍注のうち、本文に置き換わるべき文字を含むものは「」、その他の校訂注・説明注は（ ）で示した。

- ・ 原文の欠損・難読字は字数を推定して□で示した。

- ・ 抹消された文字は左傍にゝを付した。

- ・ 原文の改行箇所は『で示した。

(6) 卷子装、一卷。個人蔵。埼玉県立歴史と民俗の博物館編・発行『鉢形城主 北条氏邦』（二〇二四年）参照（No.六八）。本史料の調査に当たっては、寄居町教育委員会の石塚三夫氏から御協力を得た。巻首および巻末の写真は後掲の通り。

(7) 卷子装、一卷。個人蔵。前掲註(6)図録参照（No.六九）。本史料の調査に当たっては、小鹿野町教育委員会の肥沼隆弘氏・山本正実氏から御協力を得た。巻首および本稿掲載部分末尾付近の写真は後掲の通り。

(8) 【史料二】の記載は現代にまで及ぶ。本稿では個人情報保護の観点から、明治時代以降の部分は掲載を見送った。

（付記）本稿の執筆にあたっては、調査の機会を与えてくださった史料の御所蔵者をはじめ、多くの方々の御協力をいただきました。末筆ながら、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

